HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	古井由吉『栖』読解のための基本的要件 ： ジェンダー・モダニティ・狂気
Author(s)	石曾根, 正勝
Citation	国語国文研究, 133, 43-59
Issue Date	2007-12-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93366
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_133-43-59.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

古井由吉『栖』読解のための基本的要件

――ジェンダー・モダニティ・狂気

石曽根　正勝

はじめに

本論文は古井由吉の小説『栖』の読解・分析を目的とする。古井由吉の執筆活動は四〇年余りに及ぶ。しかし古井の小説に関する批評は同時代評が多くを占めており、長編テクストであってもものによっては精細な論考がなされていないものも多い。特に〈中期〉と目される時期に書かれた小説、『槿の火』（七四）および「聖三部作」（『聖』（七六）・『栖』（七九）・『親』（八〇））は古井の創作活動における位置づけがいまだになされていない。いやむしろ、この時期の長編小説は不当に忘却されていると言ってもよかろう。今回、『栖』の分析を試みることで古井の中期への注目・研究の手がかりとしたい。[注一]

『栖』は季刊文芸同人誌「文体」にて一九七七年九月号から七八年一二月号まで連載、七九年一一月に平凡社より単行本として刊行され、八〇年の日本文学大賞を受賞した。このテクストは『聖』の続編として書かれ、また、同じ「文体」誌上で継続連載されて単行本化した『親』をもって完結する三部作の中間にあたるものである。

三部作の中間部にあたるテクストを単独に扱うことの理由を確認しておきたい。『聖』では地方都市郊外にある〈村落〉独自の土俗信仰に基づいた性愛のあり方が全面的に扱われていたが、続編『栖』の方ではこの土俗信仰のモチーフは〈抹消〉され舞台も東京という〈都市〉へと移り、性愛のあり方もより〈近代的〉・〈個人主義的〉なものへと変化して展開される。つまり前作『聖』とは著しく異なった方向性を打ち出している。だから『栖』は、『聖』の単なる続編でなく、〈相対的自律性〉を持っており、『聖』から切り離して単独のテクストとして扱いうる条件を擁している。[注二]むしろ『栖』を『聖』の単なる続編として読むことは『栖』独自の〈近代性（モダニティ）〉が隠蔽されてしまう。また一方、完結編『親』との関わりは、「文体」誌上連載時では一連の続きものとして発表されており、『栖』『親』

をひとまとまりのテクストとしてみなす方が妥当であろう。しかし『栖』の重要なテーマは〈狂気の記述／記述の狂気〉であるのだが、『親』においてはその〈狂気〉からの〈回復〉が主要なテーマとして変化するため、『親』を含みこむ形で『栖』を検討するとその〈狂気／記述〉のテーマが〈狂気からの回復・治癒の物語〉としてテーマ上の縮減あるいは予定調和として読むことを強いられる。そう読んでしまうと『栖』が単独の形で提示していた〈狂気／記述〉の問題提起を、その生産的可能性において消極的・価値否定的に捉えざるを得ないことになる。本論の目的は古井の作品における〈狂気と記述〉のテーマ性を可能性・肯定的価値の方向性で検討することにあり、今回はその検討をテクスト『栖』に絞るため、「聖三部作」という通説的捉え方からの〈離反〉を行い、自律的単独性をもったテクストとして『栖』を扱う所以である。今回の『栖』単独での検討は、逆に「三部作」のまとまり以上の、古井作品群総体における包括的な〈狂気と記述〉というテーマの検討へと広がりを持つ将来的生産性の、その第一歩となる。さらには古井テクストのみならずたとえば日本近代文学史における〈狂気と記述〉という相での〈読み直し〉の新たな可能性（『浮雲』『或る女』から『死の棘』まで、など）を秘めた分析上の有効性を目論む、その一歩としての意味もある。

以上の展望を将来的に見据えつつも、今回はあくまでテクスト『栖』に絞って検討を進める。本論の段取りとしては、佐枝と岩崎という主人公男女のそれぞれの特異性を抽出し、その非対称的な特異性を異性愛の形で交渉する過程で起きる〈狂気と記述〉の様々な位相を確認していく。この確認・分析を通じて、主人公男女のそれぞれの特異性が近代以降の規範的ならびに類型的ジェンダー機制から逸脱・孤立したジェンダーアイデンティティを構築している様を明らかにし、その様相が既成の共同体を忌避する形で逆に〈近代性（モダニティ）〉の〈困難（アポリア）〉を浮かび上がらせていること、その〈近代の困難〉が〈狂気の記述／記述の狂気〉として惹起されていることを確認していく。

一、佐枝という女について

『栖』の大まかな筋としては、東京オリンピック開催（六四）前夜、ある地方都市郊外の村落にて登山帰りの男・岩崎が〈村娘〉佐枝と性的関係を結び一旦は別れるが、東京で再会・結婚、佐枝の出産以降にその夫婦関係は狂気の様相を帯びていく物語、といった程度の情報を確認しておくぐらいでよいだろう（『栖』の結末で佐枝は精神病院に入院し、『親』ではその狂気が徐々に回復されてゆく経過を辿っている）。『栖』の後半全般に散りばめられたこの狂気の様相の、その浮上の由縁を知るには岩崎と佐枝の、それぞれの〈生の様式〉の複雑な特異性を見てゆかねばならない。

まず佐枝だが、この女性は岩崎と出会う前に、都会での生活に憧れて生まれ育った地方村落を出、上京したという過去を持つ。その〈都会への憧れ〉の理由は「人ではなくて、背中に負った育ちや暮し、都会の上品な雰囲気に惹かれていた」ことであり、「自分の育ちの身辺には見られない」「あくの薄い」あの「匂いの薄さ」が「信じられない」と思う。上京した佐枝は都会育ちの男性と性的行為を交わす

ことで自身も「匂いが薄くなる、あの雰囲気に加われると思った」、「男の人と寝る、とはそういうことだった」と回想する。つまり佐枝にとって〈都会への憧れ〉とは、自分の郷里にある〈地方／農村／村落〉ならではの地縁・血縁関係の〈濃さ〉を忌避したためのものであり、〈前近代〉的（とされる）共同体には〈望めない〉質としての「薄さ」に「加わる」＝同一化を志向して〈都市〉の「男の人と寝る」のである。佐枝の志向は構造的に見ると〈地方・農村＝地縁・血縁の濃さ＝前近代〉と〈都市＝性愛の薄さ＝近代〉という対置関係において後者を志向することと確認できる。この二項様式が〈濃さ／薄さ〉〈濃度〉という〈匂い・嗅覚〉（感覚）の位相で感受される様は古井テクストにはおなじみの比喩＝置換表現であることはさておき、上京した佐枝は実際に都会育ちの男性と、次々に六人と性的関係を結び、〈近代・都市＝縁の薄さ（共同体形式の希薄さ）〉との同一化を図るのだが、しかし〈近代・都市〉での〈性の様式〉は男に都合のいいものでしかあり得ないことに佐枝は直面する。「身体の関係ができたとたんに男は逃げ腰になる、男の家族たちは冷淡になる。結婚前からそんな言うことを聞くような女では先が思いやられる、と親たちに意見された」。「身体の関係を求めた」のは男の方であっても、その責任は「言うことを聞くような女」の方、つまり佐枝の側にあるとする、あくまで男の側に肩を持とうとするその「家族たち」の、〈男本位〉な〈貞操観念〉の、〈女〉＝佐枝への強要。〈近代・都市〉ならではの〈匂いの薄さ〉は〈性愛観念（規範）の希薄さ〉ゆえの〈婚前交渉〉として佐枝の許に訪れるのだが、その〈薄さ〉はしかし一方で、〈血〉の〈選択／排除〉に沿った〈血縁関係〉の〈濃い〉「家族たち」を前にしては、許されないものとされる。〈縁の〈濃さ〉ゆえの身内びいき（「肩を持つ」）の形をとって、〈男本位〉に〈貞操観念の欠如〉となじられる〈縁のない女〉＝佐枝。この男女差別的に〈無縁な女〉を責める一方性とは、婚前交渉も〈男にだけ〉は許したりする〈結婚を前提にした恋愛＝ロマンチックラブイデオロギー＝性愛の規範〉の〈近代性（モダニティ）〉に沿ったものでありつつ、その〈一方的責任（応答性）〉のモダニティの帰結としてある〈一夫一婦制〉に根ざした〈近代・家族〉の〈縁の規範〉において〈無―縁の女にだけ〉強いてくるもの、そういう〈一方性〉なのだ。つまりそれは〈縁＋男本位＝家父長制〉というおなじみの名の下に〈無―縁の女〉を忌避する〈近代〉そのものである。佐枝という一人の〈村娘〉が直面したのは、理想としての〈薄さ〉の〈近代〉と、現実としてある〈濃い―近代〉との絡まり合いからなる、〈女にとって〉の〈近代〉の〈困難〉＝〈アポリア〉そのものであると言ってよかろう。

　このようにして佐枝は、憧れていたはずの〈近代・都市〉で、合計六人の男性から〈男本位に・一方的に〉性的対象として〈のみ〉まなざされ・欲望されつつ、あくまで〈縁なき女〉として扱われる体験しかできなかった。その過程で「佐枝は苦痛しかない身体をただ差出している自分がさすがに疎ましく」なった。自分が欲望されるのはこの〈性的な身体〉だけなのだ、という思い、〈性的にしか・男本位にしか・搾取されるしか〉ない〈疎ましい＝疎外化＝対象化〉された存在なのだという自己規定＝主体化＝従属化。それは言い換えれば、複数の男性との〈差異なき反復関係〉という〈疎外〉化の

過程で、〈全人的・全体的〉にあった自分を〈事後的〉に〈発見〉することであり、その全人的・全体的〈心身一体感〉の〈偽想〉から、内面・心理・精神・意識が身体から〈疎外〉されてある、という心身の乖離関係が自覚されること、とも言える。それは端的に〈性的身体〉と同義としてある〈女の／としての疎外〉でもある。だから佐枝は「男の力にすこしも揺すられていない自分を眺めていた…」、「なんだか感情がもう動かなくなっていたみたい」と〈疎外されて〉意識するしかない、そういう〈女の身体〉との／からの乖離感覚としてある。テクストのこの記述の背後には、〈近代＋都市＋異性愛＋男本位＝家父長制〉という体制＝規範の下に、〈縁なき独り身の女〉＝佐枝は、〈包摂〉されながら〈排除〉されてあるという（本論の読者ならこれもまたおなじみであろう）〈引き裂かれた〉あり様、というものが〈書き込まれ〉てもいる。佐枝は〈女としての近代のアポリア〉を心身乖離の相で体現している。

佐枝は〈男たち〉との関係で妊娠し、堕胎して、郷里＝〈地方／農村〉に帰還する。「前の年の秋に戻って、夏前までからだがまだはっきりしなかったわ」。乖離感覚は一年に及ばんとするほど根が深いものであった。それは一年後には〈疎外から回復〉したとして、その郷里への〈帰還〉が〈原初性・全体性の回復〉＝〈郷里への回心・順応〉として読めれば話は簡単（民話類型的に構造分析読解を施せれば簡単）であるのだが、しかし事態は単に〈一時的な退却〉でしかなく、〈志向した都市から忌避されたあげく、忌避したはずの郷里に一時的に退却するしかなかった〉といった態の、〈一進一退―極まる〉引き裂かれたアポリアには変わりない、と見るべきだろう。なぜなら「からだがまだはっきりしなかった」その転機とは、岩崎が登山帰りに寄ったその村落で佐枝と出会った、という〈事件〉があったからだ。岩崎という〈異人としての男〉と出会った際、佐枝の認識のあり様は、〈都会の男たち〉との出会い方とまるで異質、あるいは対極的なものとして記述されている。

釣橋の上のあたしに気がつくと、草むらの中へ、ぬうっと潜りこんで逃げ出したわね。あたし、橋の上から、ずっと見ていたんです。目を惹くために、わざと橋を揺すったの。男の人をあんなに眺めたのは、あれが初めてだった。振向かれた時には、ざわざわっとした。

このとき佐枝は〈男という存在〉に対して、初めて主体的に・能動的に〈まなざす〉。〈都市〉では受動的にしか〈男たち〉に対し得なかった、〈男たち〉から〈一方的〉に〈まなざされる〉しかなかった、その佐枝が、〈郷里の村〉の〈中〉で偶然出会った〈登山帰り〉の〈異人としての男〉＝岩崎を能動的に「見る」のである（一重傍線部）。と同時に主体的・能動的に〈まなざされる〉ことをも〈欲望＝志向〉しようとする（二重傍線部）。それははじめての〈誘惑〉であり、〈他者の、それも男の歓待〉のはじまりを覚悟しての〈誘惑〉である。そしてこの佐枝の〈誘惑・歓待〉に〈応答〉する形で岩崎が「振り向」き〈まなざし―返す〉ということが起こる。このとき、お互いが主体的に〈まなざし―合う〉という〈双方向的〉な関係性が成立し、この〈能動的な視線の、双方向的な交錯の力学〉がはじめて実現する。「振り向かれた」その〈はじめての出来事〉が実現した瞬間、

佐枝はだから、「ざわざわっと」する（波線部）。疎外された「疎ましい」はずの〈身体〉で感受してしまう、その感受は快よさでもあり得る、戦慄の「ざわざわっ」[注三]。後に二人が同棲・結婚したときにも、佐枝はこの点を強調している。「あたし、橋の上から、お墓にいるあなたを見ていたんです」「まるでいまこうして岩崎といることの、絶対の根拠を言い立てているかのようだった」。佐枝にとって絶対的な根拠である〈あなたを見た〉という主体的な体験[注四]。

そしてその言葉に続けて佐枝はこうも言っている。「あの時もう、あなたを憎んでいました」。これはどういうことだろうか。まだ目を見交わしただけの岩崎になぜ憎しみを抱くのか。それは過去の男性関係の中で〈抑圧〉されて〈隠蔽〉されていた「憎しみ」の感情が、岩崎と〈まなざし得た〉瞬間、その肯定的なまなざしと同時にして、その抑圧から〈解放〉（昇華ではなく）されたからではないか。結果意識野に噴出・露呈した〈男たちへの憎しみ〉が、〈まなざし〉の対象である岩崎へと〈全人的・全体的〉に一気に投影されたと考えることはできないか[注五]。少なくとも単純に恋とか愛とかいう〈近代的〉な性愛イデオロギーの名称では括りきれない質の思いを、佐枝が岩崎に対して抱いていることは確かである。例えば、決して「好き」という形で岩崎を認識しようとしないあり方や、あるいは「あたしみたいな女」が「打算で真剣になれば」「身も心も恋になるんです」という言い方。「真剣な打算」こそが「恋」＝近代的イデオロギー＝規範だと認識する佐枝にとって、「打算」で結ばれたのではない・つまり「恋」ではない岩崎との関係は、「憎しみ」も含みこんだものであり、当然それは「恋」という〈近代のロマンス〉には括れない性質のものである[注六]。また岩崎の方も、この独特な関係のあり方に同様な思いを抱いている。「いとおしさとも憎さとも、区別をつけることがすでに無意味と思われた」、あるいは「これはどういう女だろうという訝りがこの醜悪な声となって集ってくる。しかも佐枝という女を疎む気持すら伴わない。むしろ愛情に似ている」。佐枝と岩崎、両者にとって、それは恋愛というカテゴリーには括れない〈なにものか〉なのだ[注七]。

さて、郷里の村で、佐枝は初めて主体的・能動的に男性・岩崎と関係を結んだ。登山旅行の帰りだった岩崎は東京へ戻り、佐枝も岩崎との再会を願って再び上京することになる。「郷里の連中にも、人に頼らず生きていきますと大見得を切ってきた」のだが、「東京に着いてから佐枝は、このまま岩崎に逢ってはいけないと考えなお」すことになる。岩崎のことを「いずれ一緒になるにしても、せめて自分自身の住まいだけでもしっかり決めて、すぐその晩からお荷物にならないようにしてから、逢っても遅くはない」と思う。この慎重さは、過去の男関係において、男や男側の家族から疎まれたという経験があるからだと考えるのが妥当であろう。さらに佐枝は、岩崎との村での性交渉で妊娠していることに気付くのだが、そのとき佐枝が考えることは「あれは、村でのことなんです。村の女の、気狂い沙汰なんです。それを、東京まで出て来て、あなたのところへ持ちこむなんて、あさましいようで」。ここに、佐枝の不幸があり、奇妙にねじれた認識が確認できる。〈都会〉と〈地方の郷里〉という二つの別な空間にそれぞれ別様な思いを抱いている佐枝は、〈退却した郷里〉での「絶対的な根拠」であり得たはずの経験が、「東京」に

来た途端、〈都市的〉な様相に引きずられる形で相対化されて感じられてしまうのだ。あの岩崎ですらも、〈近代・都市〉に戻ってしまえば〈男たち〉と同じように佐枝を忌避するかもしれない。その可能性を思って、「あれは、村でのこと、村の女の、気狂い沙汰」だと解釈を変更し直して、岩崎に会うのを躊躇してしまう。ここで佐枝の言う「気狂い沙汰」とは無分別・勘違いといった程度の感慨を誇張して言ったものとも考えられ得るが、しかし〈村から都市へ〉と〈境界を移動〉することで〈村〉での感慨が「気狂い沙汰」に変容するという狂気の〈分割作用〉は注意にとどめておく必要はあるだろう。なぜならテクストの進展にともなって多角的に展開される〈狂気の記述／記述の狂気〉の、その最初の暗示＝先ぶれであるからだ。〈越境〉にともなう〈認識の変容〉がまず〈狂気の記述〉として佐枝の口から言明（エノンセ）される。

岩崎に再会することをやめた佐枝はまた堕胎する。そして再び〈都市での独り身の無―縁の女〉として生活する選択をする。「立居にしっかり節目をつけるよう佐枝は心がけた。誰かに見られているつもりでふるまった。ひとりで食事をする時、髪をとかす時には、だらけたふうにならぬよう、とくに気をつけた」。〈個＝孤〉を志向して佐枝は息苦しいまでに〈自己管理＝自己監視〉を自らに強いる。その過剰な〈自己監視＝管理〉は、〈男たち〉から再び一方的に欲望されることを遮断するためであることは例えば次のような記述、「ふっと昔の安易さにくつろぐような気持になる。すると、相手は求めてくる。」からも明らかだろう。〈近代・都市〉の〈男たち〉と再び関わってしまうとまた疎外的な心身乖離へと戻ってしまう。それを回避するための〈自己への配慮〉という〈個＝孤の生の様式〉として、ぎりぎりの〈生のテクノロジー〉として、この過剰な〈自己監視＝管理〉はあるのだ。

郷里から〈絶縁〉して再度上京し（「人に頼らず生きていきますと大見得を切って」）、しかし今度は徹底した〈個＝孤〉の生様式をとって〈男たち〉との関係を一切拒む〈独り身の無―縁の女〉＝佐枝。都市と郷里との〈越境〉を繰り返した〈往還〉＝反復＋差異の重層化の結果、佐枝は一切の〈性〉を拒絶する。それは〈血縁＋地縁＝村落共同体〉との〈絶―縁〉に加えて〈都市〉にあっては〈近代的家族という血―縁〉の〈女の〉組み込まれ／排除される原理としてある〈性愛〉を拒絶すること。〈性〉における／からの〈個＝孤〉という形で徹底した〈無―縁〉を志向すること。言い換えればこの〈無―縁〉志向は地縁ならびに血縁による〈既成共同体〉からの退避であり、そのための〈個＝孤〉志向とは都市という〈近代的個人主義〉志向も存在する空間だからこそ成立し得る点で、これは徹底した〈近代性・モダニティ〉志向のひとつの極ではあろう。[注八]

しかしこの独特な生＝性の様式を孤独に・特異に緊張の相の下維持した生活をしていても、ある日、会社の同僚男性から婉曲に関係を迫られてしまう。その結果、「ある晩、佐枝は部屋の中で、わけのわからぬ発作におそわれ」ることになる。「我に返ってみると、失禁までしていた。／そのことで佐枝は自分の身体に怖気づいた。」「それを境に、身体は何を言われてもむっつりとして返事もしないようになった」とある。先述したように心身の乖離関係を佐枝は既に経験していた。だが今回はさらに「わけのわからぬ」身体の反応が現れ、

意識されないままに「失禁」までしてしまう。佐枝は〈疎外＝疎ましさ〉にも増した形で身体と〈他者〉的な関係になってしまう。「むっつりと」「返事をしなくなる」「わけのわからぬ」身体。意識で統御できないまま不可解な行動を起こす身体とは、これもまた一種の〈狂気〉ではあろう。十九世紀から二〇世紀初頭にかけブルジョワ女性に頻発した〈神経症〉、当時いわゆる〈ヒステリー〉の様相を思わせる。当時この症状に注目したフロイトは、その原因は身体の異常発作とは直接には全く無関係な〈性的な〉事情に関わる〈記憶〉が〈抑圧〉され〈転置〉された〈無意識〉の為せる業だとした。佐枝の言動・思いを濃密・執拗に記述したこのテクストにあっては事態を〈精神分析する〉までもないことは本論の以上の考察を踏まえれば明らかであろう。〈無―縁〉を志向したために〈性愛〉を峻拒してある佐枝の、その〈個＝孤〉の生様式が、一人の男によって侵犯されたからであり、その侵犯への畏れは意識の方にではなく身体で〈表象＝〈抵抗〉したのだ。そして畏れは侵犯の方ではなく身体の不如意さに注がれる。だから佐枝には「わけがわからない」。自分に所属してあるものと見做していた身体が「わけのわからない」ものとして意識されたのだ、と間接的・暗示的に言明（エノンセ）される新たな相の〈狂気の記述〉。このときには〈狂気を記述し得る〉とした記述そのものが、後述する狂気の相に至る〈記述の狂気〉、その移行はこの後のテクストの展開で起きてゆく。しかもその移行は皮肉にも、自分の身体のあり様への畏れから、ようやく連絡を取ることで実現する、岩崎との再会・結婚を契機に起こる。この〈記述の狂気〉を分析するのが本論後半の眼目なのだが、その先にまず岩崎という男、佐枝が〈無―縁〉の〈個＝孤〉から何度でも脱け出させる〈新たな異性愛〉を希望させるこの男、岩崎は、他の〈男たち〉と何が違うのか、それを先に確認する。

二、岩崎という男、二人の特異な関係＝〈栖〉

さて、佐枝と再会を果たした一方の岩崎だが、この岩崎という男はどのような存在として記述されているだろうか。

岩崎もまた彼独自の屈折した意識を抱えた存在として描かれる。「生まれた家を嫌うのもつまらないことだ」と彼は思っている。岩崎が家族を疎むのは、「普段はお互いに目も見かわせずにいるくせに（…）いったんお互いの間で事が露われてしまうと、皆、たちまちひとつに融けて、自分で物が考えられなくなって、同じ感情の反応しか示さなくなる」からだ。家族という〈縁〉が強いてくる、個人を抑圧するあり方に嫌悪感を抱いている。佐枝を忌避した〈近代的都市的家族〉とは、この岩崎という都会育ちの〈異人〉の光学に照らされると、その〈縁の濃さ〉が「総無責任体制」（丸山真男）な〈個の融解→群れの熱狂（注九）〉という〈反―個人主義／全体主義〉的な位相も持っている、そういう共同体であることが分かる。岩崎は岩崎で、佐枝とは違う角度から〈縁〉というものに〈異和〉を覚える存在なのだ（岩崎＝異和・崎？）。だから佐枝との生活を始めるにあたっても「お互いに類縁もなきがごとく暮すのは、もとより望むところ」で、岩崎もまた彼固有の認識から〈無―縁〉を志向する。また、佐枝から「相変わらずね、あなたは、人間嫌いなくせに」と言われた

り、岩崎自身も夢の中で「俺はその女にたいしては人間嫌いにならないんだよ」と自認するように、「人間嫌い」という表現認識で対人関係一般を忌むという社会的逸脱者・脱落者＝〈異人〉であり、（これもまた佐枝とは違う理由から）〈個＝孤〉としての個人主義志向であることが明らかになる。この「人間嫌い」岩崎と、〈男たち〉との〈性〉を峻拒するに至った佐枝とが、それでも結びつくのは、お互いそれぞれの〈個＝孤〉の下であくまで〈無―縁〉を志向する存在同士だからこそ〈まなざし―合う〉ことができたということなのだろう。既成の〈縁〉から自らの関係を派生させる規範的／類型的なあり方を拒み、〈無―縁〉同士である二人から始まる〈縁の新たさ〉を、まったく未知の形で始めようとする。〈性別間交流的・双方向的〉な様相から〈未生の新たさ〉を志向＝試行するのだ。ここから成立（しようと）する空間がテクストの表題にある〈栖〉なのだ。[注十]

岩崎という存在の特異性に話を戻すと、以前に関係のあった女性との経験から「女の弱みを握ってはいけない」と思っている。「握ったら最後、自分のようなものは情がすさんでくる」。「情がすさむ」とは、相手の女性の従順さ（〈女らしさ〉というジェンダー類型）につけこみながら、女性に対し暴力をふるって追い込むことであることも具体的に記述される。そういう過去の自分の姿を自覚しているだけに、佐枝に対しては「相手の弱みを握るとどこまでもつけこみそうな性悪な情熱が頭をもたげかけるのをそっと抑えこみ、わざと間のはずれた返事」をするという形の〈配慮〉を行う。ここに岩崎の意識のあり様、佐枝への対峙の仕方の特異さがある。岩崎は「情がすさむ」という、男女権力ヒエラルキーに従うままに物理的暴力を女性に振るってしまう〈男ジェンダー類型〉に陥りやすい自分のあり方を自覚し、それを警戒しながら佐枝に対するという、屈折した〈配慮〉を行う存在なのだ。佐枝に配慮するため己れの女性差別的暴力性を抑えこもうとする〈自己への配慮〉。だから岩崎もまた佐枝と同じく〈自己監視＝管理〉する独自の〈生＝性のテクノロジー〉を自らに強いている。このような生様式の下で例えば、悪阻による「女の苦しみに神経を凝ら」して佐枝に対する。しかもそのような〈自己へと佐枝への〉二重化した配慮は、そのまま佐枝に分かるようには行わない、そういう〈配慮〉すら行う。「神経を凝ら」す様を見せる〈優しい男という類型〉に「おぞましさ」を感じる岩崎には、かつて佐枝を悩ませた〈男たち〉の「優しさ」という「都会風」を忌避する敏感さ、〈都市―近代の男たち〉に〈異和〉を感じる繊細さがある。その敏感・繊細からさらに屈折して、「無神経と同じ」「平然と飯を食う」という倒錯した振る舞いをする。しかしそれが「この女にたいする、いつでも最大の心づかいになるのかな」と、あくまで〈配慮〉の相で行う岩崎。それは元の「情のすさみ」に似ている」がしかし、屈折／反転／倒錯した〈差異〉をもつ点で決定的に〈類型〉とは異なる、そういう「所詮無神経と同じ」という配慮。佐枝に対するときの、この独特な配慮に岩崎の特異性が先鋭的に現れている。

このような二人が同棲し、結婚し、子供が生まれる。特異な〈自己監視＝管理〉の下、〈配慮―し合う〉二人は、お互いの気持ちを「先回り」し合う関係になる。それは緊張の様相を見せ、そんな日々の中「岩崎はいつでも胸の内でひそかに息をついた。女の存在を持て

余したわけではない。自分の神経を持て余したわけでもない。しかしほかでもない飯を食う時に、これほど気持を読まれ先回りされるようでは、悪阻の間だけでも、先が思いやられた」。しかし「いつでも」相手の「気持を読んで先回りする」のは岩崎の方とて同じである。[注十一]

出産も無事終え、子供を前にして岩崎が自分の子供と思えぬような異和感を抱いたり、あるいは佐枝がいまだに岩崎との関係をどこか危ういものとして考えるなど、二人の関係のあり方は微妙なバランスの中で進んでいる。「すべてが順調だった」とあり、「そんなこともあったが、岩崎はほとんど気にも留めずにいた。訝りはそのつど点となって孤立し、繋がらなかった。」とある。この思わせぶりな暗示的記述ののち、佐枝は出産後、徐々に〈おかしな〉言動をし始めていくことになる。

三、〈狂気／記述〉について

佐枝の〈おかしな言動〉の表れは、まず近所の主婦たちへの言及において起こる。

あたしたちの仕合せを、ご近所に悪く取られてはいけないわ。皆、親身ないい人たちばかり。あたしたちのことが心配で見ていられないの。(…)でも、羨んでいるのよ。あなたが、あたしと子供のことできりで……(…)近所のことなんか、ほんとうは、見たくも見られたくもないのよ。だけど、人の目は欺かなくてはいけないの、好意には応えなくてはいけないの。(…)親切な人たちを怒らせるのは、恐いことよ。思われているとおりの者に、外目には、ならなくてはいけないの。

佐枝の言明[エナンセ]には、「近所の主婦たち」の意に沿おうとする立場と、しかしその陰で主婦たちへの疑心を隠さない態度とが奇妙な形で混ざり合っている。しかも実際には近所との付き合いはないことが直後で明らかになり、すべてが佐枝の〈妄想〉だと読者にも岩崎にも気付かせる。しかしテクストはそれを〈狂気〉とは明示的に記述しない。テクストの記述が言明するのは、佐枝の言明の中に非一貫性を持ち込み、さらに言明自体も佐枝の〈言―動〉の非一貫性の中にあるという、暗示的／潜在的相においてだ。ここに『栖』の〈記述／狂気〉のさらに新たな相が展開する(ただしこの相もまたあくまで、佐枝の言―動を対象化して記述している点で〈狂気の記述〉の相にとどまる)。

しかしなぜ佐枝はこのような〈狂気〉に陥ることになったのだろうか。理由は、佐枝自身の言明の中に〈痕跡〉をとどめている。「誰ひとり、立会人がいない」、類縁のない形で結婚し、「ご近所に悪く取られない」ような付き合いもせず、ただ〈無―縁〉からの新たな〈縁〉を創出するはずだった……しかし出産という、いままで経験のない局面に直面したとき、佐枝は堅持していたアイデンティティ＝一貫性を放棄し、手本とするモデル(規範／類型)を求めて今まで忌避していた「近所の主婦たち」により添おうとして〈引き裂かれる〉。実際には付き合いも同一化もできないまま、ただ自身の反―一貫性のアンビヴァレントを言明するしかない。〈新たな縁〉という、

規範／類型からの〈差異化〉の困難はその困難さゆえに急激な〈反動化〉への誘惑に駆られたりする。いわゆる〈転向＝回帰〉の物語。しかし佐枝は転向＝回帰せず辛うじて誠実にも己れの中の拮抗の引き裂かれに留まろうとする。その苦しみが先の〈言明の狂気〉なのだ。〈個＝孤／無＝縁〉志向が〈近代個人主義〉のひとつの極であるとは先に述べた。だからその果てのひとつの方向性・可能性の追究にある〈新たな縁〉とその困難も〈近代性＝モダニティ〉のさらなるひとつの極の様相であろう[注十二]

佐枝の言―動における〈狂気〉は岩崎にも向けられてゆく。まず岩崎と近所の主婦たちを結び付けて考えようとする佐枝。「皆、育ちから言って、あなたの同類なのよ。この関係は先行きむずかしいって、あなたに忠告しようとしているのよ」。この言明にはかつて憧れそして忌避した〈近代・都市〉「育ち」で岩崎もあるという側面に向けられている。それゆえの不安感・不信感を「近所の主婦たち」の言葉として言明し、岩崎との関係を〈男たち〉に収束・回帰しようとする。佐枝はまた当の「近所の主婦たち」に尋ねもする、「うちの主人は、どう見えますか、ここを自分の家と思っているんでしょうか」。この言明には、岩崎との関係を支えきれなくなっている、〈栖〉も信じられなくなっている様が明らかだ。だから岩崎への思いも近所への忌避感も引き裂かれて相俟って混乱し「まるで近所と手を結んで岩崎を包囲するように言っていたのが、岩崎と身を寄せ合って周囲からの追及を悔まさなくてはならぬと思いこん」だりするようになる。岩崎の思いという形でテクストの記述ははっきりと「われとわが恣意に振りまわされて、苦しんでいる様子だった。」とある。テクストではあくまで「われ」と「わが恣意」との分断という相で記述しながら、佐枝がアポリアに引き裂かれた反―一貫性の中にいることを示す。岩崎への引き裂かれた思いはまた、岩崎本人の屈折／反転／倒錯した意識のあり様にも向かう。「あなたが、恐いのよ。いまにあの子にまで乱暴をはたらきそうな気がするのよ。あの目が恐いのよ。あたしが怯えているのをすぐに感じ取ってやさしげに振向くの。ねえ、助けて、お願いだから」。岩崎自身が「おぞましい」と思っている「やさしげ」な「あの目」。岩崎の視線を、狂った佐枝には「自分が怯えている」のを察知する「恐い目」に思えてしまう。「佐枝の忌み恐れる当人のくせにそんな保護者の口をきいている自分を、岩崎は滑稽にも腹黒いようにも感じた」。忌み恐れる人間でもあり、保護者でもある存在、と佐枝にされ、それをも受け容れようとする岩崎。佐枝は毎晩のようにアパートの窓の前に立つ習慣にもなる。それはなぜか、岩崎は尋ねる「おい、お前は、誰を待っているんだ」／「あなた」／「それじゃ、そばにいたのは誰だ」／「あれは、あなた」。ここにも岩崎が、佐枝の中で二重に存在していることが明かになる。自分の傍に付き従いながら、しかし帰ってくるのを待望する夫としての岩崎。〈畏れといとおしさ〉に引き裂かれて共存する、岩崎への思い、それはまさに岩崎を初めて「まなざした」瞬間から始まり、「気持ちを読んで先回り」し合う緊張関係の中でさらに分裂するに至った。佐枝が岩崎に対し分裂・矛盾するような態度を取るようになったのも、それは単なる錯乱ではなく、むしろあまりに誠実に自らのアンビヴァレントな認識に従っているだけなのだ。引き裂かれる佐枝、それをも受け容れようとする岩崎。その困難な

〈栖〉でぎりぎりの形で辛うじて保たれている、「恋」ではないはずの、〈いとおしさ〉。二人のこのぎりぎりのやり取りは胸うたれるものである。

だがしかし、なぜ佐枝は〈狂気〉に陥ったのか。あるいはこうも言ってみよう。なぜ佐枝は〈狂気の記述〉の対象になったのか。出産があるべきモデルを求めた、という先述の解釈はあくまで〈記述〉の〈理性〉を信じていての話（解釈）である。それはつまり〈記述とは一貫性の相にある〉という立場をとって、その立場からテクストの記述に浮かび上がることを素直に従ったということだ。

ならば〈記述〉そのものも〈狂気〉にあったとしたらどうなるか。つまり〈記述そのものの狂気〉に目を凝らす。そのときテクストは、佐枝の変容の目安であった出産後の経緯の中で、〈おかしな〉記述をしていることに気付かされる。しかもその〈記述の狂気〉は、佐枝にではなく、岩崎の方を記述の対象に選んでいる。先述したように岩崎は〈屈折／反転／倒錯〉する〈自己監視／配慮の先回り〉を行う存在であると述べた。しかし次のような記述のときの岩崎はどう〈解釈〉すべきなのか。私・論者が「白い花」のエピソードとして注目する記述である。

それから岩崎は畳に仰向けになり、とろとろとまどろみながら、戸棚の上の白い花を見ていた。目に入れながら、気がつかずにいた。しばらくして佐枝が戸棚の前に来て花をすっと抜き、また台所へ出た。紙にくるんでひねる音がして、岩崎は我に返った。足音が戸口から出て、階段を降りて行った。寝床に入ってから、岩崎はようやくたずねた。

「花を捨てたのか」

「部屋に入る早々、あなた、厭な顔をしたでしょう」

「気がつかなかったんだよ。しかし佐枝は、花を飾ったことはなかったじゃないか」

（…）

「ああ……」と岩崎は起きあがり、パジャマのままのっそりと家の外へ出た。階段を降りて共同のポリバケツの蓋を取り、離れた街燈の光をたよりに、濡れゴミの中を棒の先で突きはじめた。七分ほどに咲いたのとふっくらとした蕾のと、白薔薇を二輪指につまんで寝床の裾に立つと、佐枝は肘をついてなかば起き直り、

「あなたという人は……」あとは物も言えぬ様子で、掛蒲団の縁をめくって招いた。岩崎も猛々しいような花の異臭の名残りに物を考えられぬ気持で黙ってそばに寄り、押し潰された花を枕もとへ投げだし、まだ肘をついて啞然としてこちらを見ている女の胸を、まるで汚れ仕事の報酬のように、やにわに開いた。ゴミバケツの蓋を開けたのと同じ手だ、とそんなことをちらりと思った。

「あなたという人は、すこしも変わらない……誰にでもそうするの」

刻々腐っていくような花の匂いが、くりかえし胸の奥でふくらんだ。

ここで注目すべきは、このとき岩崎はいつものような反転／屈折した意識を欠如しているかのように〉記述されていることである。その結果、花を拾ってくるという〈配慮〉の行動がそのまま「情が

すさんだ」行為と直結している〈かのように〉立ち現れる。佐枝の場合〈狂気〉とは言―動の非―一貫性として現れる（記述される）のに対し、岩崎の場合は言表を欠いた行為の、それまでの記述からの背反（反―一貫性）として現れ／記述される、という違いが確認できる。そんな岩崎を前にして、佐枝はただ「唖然とし」、辛うじて「あなたという人は、すこしも変わらない」と言う。岩崎を評して「変わらない」と佐枝が言っている表現はこのテクストには他に一箇所しかない。それは「相変わらずね、あなたは、人間嫌いなくせに」と先に指摘した佐枝の言葉である。つまり佐枝はこのとき、岩崎の「人間嫌い」の変わらなさを思い知らされている。しかも、「誰にでもそうするの」という言葉。つまり、「その女にたいしては人間嫌いにならないんだよ」と岩崎も認めていたはずの佐枝に対してすらも、この瞬間、人間嫌いであることが露呈される。初めてへまなざし―合えた〉男性だった岩崎すらもが、〈男たち〉と変わらない、私・佐枝を他者化する男であった、その証拠に自分の胸をやにわに無言のまま開こうとするその暴力的な仕草は、佐枝を性的な身体として一方的に・自分本位に欲望する〈男たち〉の姿と同じではないか。それは佐枝にとって決定的な絶望であったはずだ。テクストを詳細に辿っていくと、佐枝の〈おかしな〉言―動は、この「白い花」の出来事／事件の直後から、つまり岩崎の心理表白を欠いた形での〈男たちの類型〉そのもののような態度の直後から、はっきり明確に現れている。

佐枝の〈狂気〉が露わになってからの岩崎は「白い花」の行為の反―一貫性からまた〈配慮〉の相貌に戻る。「どんな奇怪な妄想でも受け容れたい、包みこんでしまいたい」と積極的に、〈狂気の佐枝〉を何とか受け容れようと苦闘する岩崎はときには、逆に「病気を手伝うことにならないでしょうか」と医者に思い悩みを告白したり[注十三]、「ひょっとして根が狂っているのは俺のほうで、自分では知らずに、佐枝にこんな妄想を強いているのかもしれない」と「夢のような疑い」を抱いたりするが、「白い花」の経緯、その時の自らの態度は振り返ることをしない。岩崎にとっては「白い花」は記憶や回想、自省の対象ではないということなのだ。ただ〈配慮〉しながら佐枝を受け容れようとする岩崎が相変わらずいるばかりだ。しかし『栖』の最後を彩る三日三晩にわたる佐枝と岩崎の攻防・格闘の執拗なまでの詳細な記述が展開された、その挙句、岩崎はまたも〈配慮〉を突然欠いた状態になる。「岩崎はのっそりと女のそばに寄って屈みこみ、目をひらいたままなのが憎くて、頬を左右から張った。垂れた顔を、顎に手をかけて引起こし、夜明けを滲ます窓のほうへ、首実検みたいに捩じ向けた。いましがたの美しさの名残りもない顔が目を深くつぶっているのに、満足を覚えた。そのとたんに、我に返った気がした。／「俺は、狂っていたのか。何日前からだ」（…）「よし、もう安心しろ、もう狂わない」。岩崎は最後の最後ではじめて己れの言―動を「狂っていた」と明示的に名指す。そのとき直前までの記述は遡行的に〈狂気〉として読み直しが迫られる。岩崎の〈狂気〉とは、〈配慮〉の欠如が露呈する「情がすさんだ」類型的暴力性が結実（昇華？）して「満足を覚えた」瞬間に、本人自身から〈狂気〉と対象化（自らの言―動をメタ的に認識）される。お互いが〈狂気〉にあるとようやく気付き岩崎は佐枝を精神病院に入院させてこのテ

クスト『栖』は幕を閉じる。

この結末から、岩崎の〈狂気〉は佐枝のそれに触発された一時的なものとされる（自分は基本的に正常であると自認する）から、岩崎の入院の可能性は不問に付される。テクストは岩崎を入院させない。テクストもまた岩崎を正気としている。しかし「白い花」の経緯の例外的な記述を〈記述の狂気〉の基点として考察してきたわれわれとしてはテクストのこの結末の記述に不審＝不信を覚えざるを得ない。だがテクスト自らが岩崎の入院を認めることは同時にテクスト自身が入院されねばならないことになる。なぜなら〈岩崎の狂気の記述〉は〈記述そのものの狂気〉によって描出されてあり、佐枝のそれとは位相が違うのだ。〈狂気〉を明示的に言明するのはあくまで佐枝と岩崎の言明＝発話＝セリフのみであったことを留意されたい。つまり地の文にあたるテクストの記述それ自身は外在的に〈狂気〉と言明しない。しかし「白い花」や結末の岩崎の言明にまつわる記述に注意を喚起した本論述を踏まえたいま、〈記述そのものの狂気〉が存在したことは明らかだ。岩崎の言―動の〈配慮〉を明示した上で、突然その特異性を廃棄して記述を行う記述みずからの非―一貫性、という〈記述の狂気〉。岩崎の〈狂気〉は〈記述自身の狂気〉として現れる。だから岩崎を入院させる以上はテクストも入院してもらわねばならぬ。だが決して記述は自らの〈狂気〉は認めていない。外在的に〈私・記述は狂っている〉とは言明しない。だから岩崎も入院させない。ここに『栖』の〈狂気／記述〉の多角的な様相のその先鋭化の果てとして〈記述そのものの狂気〉が現れ、古井はここで単行本として（自律・完結したテクストとして）一旦幕を下ろす。

最後に

『栖』というテクストは、佐枝と岩崎および記述自身の〈狂気／記述〉をとおして（その様相は様々な形をとる）、このカップルの特異的な異性愛の〈新たさ〉を困難としてのアポリアの方向でつきつめたもの、とまとめることができるだろう。

佐枝と岩崎という存在はそれぞれ独自に〈女であること〉〈男であること〉〈縁を形成すること〉といった既成の規範的／類型的カテゴリーから逸脱して〈新たさの縁＝栖〉を模索した。二人とも、自らの課したカテゴリーの忌避をつうじて、屈折／反転／倒錯した〈配慮〉を試行し、あるいは〈まなざし―合う〉新たな双方向性に可能性を賭けたりして、〈自己を差異化すること〉を共通して実践し、〈栖〉を形成した。そういう意味で〈栖〉とはカテゴリー化を拒む自己差異化／相互差異化の極点であった。その極点は、差異化の果てしない更新の果ての、一方の〈引き裂かれ〉であり一方の〈差異化の廃棄〉という形で、困難さとしての〈狂気〉に陥る。しかもそのプロセスはテクストに企まれた〈狂気／記述〉の様々な相の実践／試行の中で記述されていることも確認した。その点で通説的に「狂気を描く作家・古井由吉」という相貌を否定するつもりはないが、企みとしての〈狂気／記述〉は一筋縄ではいかない多角的位相をもち、その〈狂気／記述〉の実践をつうじて露わになる規範的／類型的カテゴリー化からの離脱と自己差異化の提起＝試行は、今もその有効

性を失っていないことを最後に記してこの論考を終わりとする。

付記　『栖』からの引用は『古井由吉作品・五』（河出書房新社一九八三）に拠った。引用部の傍線は論者。

注一　〈中期〉への注目として、『櫛の火』に関しては拙論「異人を焼く火「」二つの頭痛の〈栖〉―古井由吉『櫛の火』について」（「日本近代文学北海道支部会報」第四号二〇〇一・七）がある。この論文の主要な論点として、規範や類型とは異なるジェンダーアイデンティティを持つ主人公男女が特異な異性愛関係を持つという分析があり、本論の論点と重なっていて、読み合わせていただければ〈中期〉古井の、テーマの持続性と多角的な展開が確認できよう。この拙論ではまた、〈初期〉から一貫している〈古井的女性〉の固有類型性を『櫛の火』以外の短編群からも浮かび上がらせており、この特異な〈古井的女性〉というモチーフの広がり・連関も確認できよう。

注二　『聖』の続編を『栖』という形で書く意思ではなかった古井自身の弁明は『古井由吉作品・五』（河出書房新社一九八三）「著者ノート」に詳しい。

注三　『聖』では同じ出来事が岩崎の一人称語りで記述されているが、佐枝の側の認識は記述されておらず「なにか勝ち誇ったような顔で、こちらへ目を凝らしていた」とだけある。このように『栖』は『聖』で起こった出来事の〈語り直し〉も目論まれており、『聖』の単なる続編とは言えない相対的自律性がこの点でも確認できる。

注四　佐枝のこの〈主体的〉なあり方は、同時代評では全く注目されていない。逆に同時代評の共通する論点として、男・岩崎の側の主体性（責任性・加害性）への問いかけがある。特に奥野健男は、性愛における「男の生き方の必然性、使命感」（だけ）が「根源的な愛」を担保するという〈男本位〉な〈期待の地平〉の下に、島尾敏雄『死の棘』（七七）と比較しながら岩崎の（男としての）主体性の欠如を批判し、「それ故に佐枝も魅力のない女にしか描かれていない」とする（「海」八〇・三）。あくまで女性を性愛における〈対象化の存在〉とする〈男本位的な・女物象化的な〉見方を提示する点は奥野の書評が顕著だが、しかし他の同時代評も一様に性愛においては男の側の主体性（責任性・加害性）が問われるという論の立て方を共有している（匿名評「朝日新聞」七九・一二・九、大橋健三郎「群像」八〇・二、川西政明「すばる」八一・三）。その点で本論は同時代評の〈男の読み〉に対して〈女の側からの〉、だけでなく〈男女双方向から〉の〈読み直し〉を迫るジェンダー論的問い直しの意味を持つ。『栖』の、当時においては先鋭的なジェンダー論的問題提起に対し、同時代の読みのほとんど全てが読み過ごしをし、むしろ〈男ジェンダー〉バイアスに偏って読まれていた事情から現在確認できることとはつまり、このテクストが発表された当時はウーマンリブからフェミニズムへの移行期という〈女の時代〉にありながらも、多くの〈男性―読者〉はジェンダー論はもちろんフェミニズム的視点すらまだ獲得しておらず、ウーマンリブ以来の〈女からの〉問題提起に鈍感であり続けた、という歴史的〈男性―読書〉状況が確認できる、という

こと。ジェンダー論＋読者論的にも興味深い〈読み〉のテクスト史料群を派生しえたのも、『栖』のその先鋭的問題提起の所以であろう。

注五　この類推が精神分析的な〈治癒〉の物語をなぞっているのは確かである。しかし〈抑圧・疎外から、治癒・回復へ〉の初期マルクス的・フロイト的〈物語〉導入は、あくまで〈事後的〉にしか〈起源〉や〈全体性〉を〈仮想〉できない、一種の〈偽想〉された〈記憶〉に過ぎないことを担保した上での類推である。愛か憎しみか、といった二項的分断の中でしか友愛・性愛イデオロギーをいまだして持ち得ない〈近代性〉の下にあるわれわれは、だからやはりいまだに〈全人的回復〉という疎外論的・弁証法的〈偽想〉を暗に担保しながら思考し続けている傾向は否定できないのではないか。

注六　近代的恋愛観の否定は前作（とされる）『聖』でも打ち出されている。しかし『聖』における〈近代否定〉は土俗信仰を〈反近代〉として〈実定的〉にポジティヴな形で（民俗学的に）打ち出しているのに対し、『栖』ではその土俗性を改めて〈抹消〉し、あくまで〈近代でもなく、反近代・前近代でもなく〉といったネガティヴな位相戦略（構造主義的）をとることで〈アポリア〉（脱構築）を浮かび上がらせ〈未生の新たさ〉を〈試行〉しようとしている。本論序盤の再確認ではあるが、だからこそ『栖』は『聖』とは背反的なテクストである面を持ち、簡単に通説的に「聖三部作」と考えることはできないのである。

注七　〈男本位な異性愛〉を崩しつつしかしあくまで〈新たな―異性愛〉による〈性別間交流的〉コミュニケーションの可能性を試行しようとする『栖』のあり方は、現在のフェミニズムなりジェンダー論の趨勢を考えると貴重である。なぜなら現在それらの研究動向の批判的要所は〈男本位〉の点だけでなく〈異性愛〉そのものにまで及ぼした結果、クィアー性＝同性愛志向が〈急進的〉とされ、制度と個々の性愛選択とが短絡されてあるかのような言説が妙な〈疚しさ〉を漂わせながら興隆しており、〈新たな異性愛〉を模索する方向性は閑却されてあるかの観であるから。

注八　同様の女性像を描いたものとして「衣」（七二）、「人形」（七六）が挙げられる。この点に関しては前掲（注一）拙論参照。その論点の概要も注一に記した。佐枝をこのような女性として記述した『栖』を当時発表されたコンテクストと共に考え合わせると次のような点が明らかになる。つまりテクストの時代背景を六〇年代中葉とし、その発表年代が七〇年代後半という事情から見えてくること。まず時代背景としての六〇年代中葉は高度成長期の中にあり、都市部偏重の経済開発は地方・農村から東京を中心とする都市部への余剰労働者の大量の移動があった。佐枝の状況もまたこの都市部への人口の流動と符節を合わせているが、しかし一方で佐枝が上京して就いた事務職は高度成長期のジェンダー（女性）労働論の角度から見ると、同じ事務職でも〈判断事務＝男〉と〈単純作業事務＝女〉という形で事務内容と性別役割分担が（女性）差別的に分断・定着した時期でもある。さらにこの単純作業事務をあてがわれた女性たちは、短期勤続で結婚を機に早期退職するのが〈望ましい〉とされていた。だからあくまで〈独り身〉

のままに働き続けようとする佐枝は当時にあってマイノリティとしての〈女性〉労働者であった（戦前戦後を通じての事務職女性労働者の様相・位置付けの推移は、金野美奈子『OLの創造―意味世界としてのジェンダー』（勁草書房二〇〇〇）に詳しい。また私・論者は佐枝の労働者としてのあり方について稿を新たに論じる予定である）。〈女性の解放〉を主張するウーマンリブが起こる七〇年代前半にはほど遠い当時にあって、佐枝が直面した男本位な性愛のあり方も、さほど問題視されなかっただろう。一方、テクスト発表年代時にあたる七〇年代後半はウーマンリブからフェミニズムへと勢力が推移しつつあるものの、女性の解放なり権利はいよいよ世情に意識されてしかるべき趨勢であった。十年以上前の独身女性労働者の苦境を記述したこのテクストもまた当然その趨勢の中で〈女性読者による読み〉、あるいは〈女性の側に寄り添った読み〉による評価はされてもよかった、そういう時代傾向は準備されつつあったはずだ。にもかかわらず、そのような読みはされてこなかった具体的表れは注三に記した。その後三十年余り経つ現在、フェミニズムは世情に定着し、定着の反動としての揺り返し（バックラッシュ）すら起こっているが、しかし、このテクストは当時の〈読みの偏り〉から〈読みの忘却〉へと葬り去られている観がある。古井が『栖』を発表した七〇年代後半当時、若き日の上野千鶴子が〈泣いた〉とされる江藤淳『成熟と喪失』（六七）や吉本隆明『共同幻想論』（六八）の〈既成の異性愛体制への疑義〉（とも読める）の論点のくだりは或る程度認知されていただろうし、実際その時代の中で大庭みな子や富岡多恵子、津島祐子、増田みず子ら、新たな世代の〈女流〉作家が既に活躍しつつ〉あった。彼女たちは当代においてもある程度認知され現在も〈女性作家〉として評価がある程度定まっているのに対し、この時期の古井は同時代の〈男たちの読み〉のままに放置されている。えてして〈女偏重＝女の身びいき・女からの差別〉に陥りがちなフェミニズムなりジェンダー論にあっては〈女の古井読み〉の登場など望むべくもない、ということだろうか。それはともかく『栖』が時代限定的なジェンダー規範／類型に焦点を絞っていることを踏まえると、同時代評の典型的な論点＝〈本質性・本来性・根源性としてある「原型」を描く作家・古井〉という超歴史的な紋切型はそろそろ見直しを迫られてしかるべきであろう（「人間の生きるあまりに本質的な姿が、裸形に近い様相で描き出されている」前掲「朝日新聞」、「原初的な男女の生活の営み」・「人間男女の根源的な、赤裸な姿」「人間存在の根底にある意識下の世界」大橋前掲、「男女の原緒的なあり方への深い思い」奥野前掲、傍線論者）。

注九　個の融解から群れへの熱狂は、『栖』以前のテクスト「先導獣の話」（六八）、「円陣を組む女たち」（六九）、「不眠の祭り」（七〇）といった最初期のテクスト群で前景化されたテーマである。『栖』においてもこのテーマが一モチーフとして後景に退きつつも持続され、さらに岩崎の認識に繰り入れる形で〈近代性〉や〈縁〉といった新たな〈中期的〉モチーフと連関されて発展的変奏が施されている様を確認できる。『栖』の後も古井は『山躁賦』（八〇～八二）で、中世と現代を混交させる形でこの〈群れへの熱狂〉を一エピソードに盛り込ませる〈反復＋差異〉を展開している。

注十　『栖』テクストそれ自体には〈栖〉の語はない。〈栖〉という独特な表現を取る空間を説明しているのはそれ以前の長編『櫛の火』でなされている。『櫛の火』で言及される主人公男女の同棲空間「栖」もまた、〈無―縁〉からまったく未知の形でお互いの関係を築き上げていこうとしている点で共通する。それ故『栖』の表題の由来は『櫛の火』から来ているものだとする見方は妥当であろう。しかし『櫛の火』にあっては「栖」は始まったばかりの段階でテクストは終わりを告げている。その意味で『栖』は『櫛の火』の「栖」という特異空間の展開という問題を全面的に引き受けたテクスト（〈栖〉）と見ることが出来る。『栖』というテクストは『聖』だけでなく『櫛の火』も〈前作〉として問題継承を図る、二つの〈親〉テクストから派生した〈子〉だという論者独自の見解もここで指摘しておきたい。この点でも『栖』は、通説的に「聖三部作」に収束させがたいテクストであることが確認できよう。

注十一　既成の地縁／血縁共同体を忌避する〈個＝孤〉・〈無―縁〉空間としての〈栖〉の独特さとはフーコー的な〈規律＝訓練〉ではない。なぜならそれでは〈他者（と想定するもの）の内面化〉として〈想像界〉（ラカン）の位相で他者との予定調和的協調を促す（それが異性愛の場合は〈対幻想〉（吉本隆明）になるだろう）のであって、それこそは二人が峻拒するものである。規範や類型から脱け出し、いちから〈新たな異性愛〉を構築しようとする二人は〈他者歓待〉の〈責任応答性〉を担った〈生のテクノロジー〉を模索している（デリダ＋フーコー）。それは決して〈ユートピア〉ではなく〈アポリア〉を前にしての〈試行〉の困難さが前景化する。互いの峻拒的自己監視の視線を「先回り」し合い緊張の持続を求められる、そういうトポスとしての〈栖〉なのだ。

注十二　〈栖〉での佐枝の〈狂気〉を、〈個＝孤への内向〉の徹底が意識の〈恣意性〉に帰結し自我の解体（反―一貫性）をもたらすと理解すれば、まさに古井が過去へ一貫して〉追究したテーマの持続・展開だと分かる。小説家になる前の大学教師時代から古井は〈近代〉の果ての〈意識の恣意性〉は〈解体〉に向かう、とするテーマを〈一貫して〉堅持していた。その詳細は拙論「エッセイズム」と「憧れ」―古井由吉、教師から小説家へ」（「研究論集」第四号、二〇〇四・一二）にある。

注十三　入院前に岩崎は佐枝をつれて精神科に診せたりしているが、この医師は病名を明言しない。テクストはだから臨床的な〈狂気〉の言明も避けている。しかし榎戸美佐子は病跡学の観点から佐枝を「分裂病的」と指摘している（「日本病跡学雑誌」三七号、八九・四）。榎本の論点に沿いテクスト中の佐枝の描出を見ることは臨床的言明を避けるテクストの本意を無視することではあるのだが、しかし、そうしたとして佐枝の〈症状〉が分裂症と特定できるかは難しい（だから榎戸も「的」という微妙な表現をしているのだろう）。特にパラノイアとの判別の点で難しいのではないか。その理由として、佐枝の近所付き合いの希薄さのために、被害妄想の対象を特定できる／できない、という判定のグレーゾーンが存在することが挙げられよう。

（いしぞね　まさかつ・北海道大学大学院博士後期課程）